

地域活性化に向けた取組みと実践

山口県立大学の「青い鳥プロジェクト」の事例を通して¹

The Report on an Overseas Training Program, “Blue-Bird-Project” for Vitalization of Local Communities

林 炫情、森原 彩、鄭 恩姬

LIM Hyunjung, MORIHARA Aya, JUNG Eun Hee

Abstract

Overseas training programs can provide the students opportunities to go outside of Japan. By looking at Japan and its culture from outside of Japan with global perspectives, students might be able to discover beauties and strengths in their own local communities, or might be able to find the clues to solve various problems. The programs using the Project-Based-Learning (PBL) approach is especially effective to cultivate students' global perspectives and critical thinking skills. This paper reports on an educational overseas program, “Blue-Bird-Project” conducted in Changwon city in Korea from September 16th to September 24th, 2015. The program was carried out with Kyungnam University and Changwon city.

1. はじめに

めまぐるしい社会の変化とグローバリゼーションに伴って、地域の課題を地域レベルにとどめることなく、グローバルな問題としてとらえ、共に取り組むことがますます必要不可欠になっている。このような時代の要求に応えるためには、国境や文化という壁を越えて、世界的な視野のもと、知識や情報を共有したり関連づけたりする中で、新たな構成要素を生み出し、問題解決に取り組むことが重要であろう。Griffin & Care (2015) は知識や情報を単体としての「点」として捉えるのではなく「線」として結び、以前とは違う新たな形を見出す、総合的に展開できる力の習得が求められていると述べている。

文部科学省 (2003) はそういった総合的な能力を「コンピテンシー」と呼び、単なる知識や技能だけでなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる力としている。つまり「何を知っているか」というよりも「何ができ

るのか」に重きがあるということだ。大学生にとって海外研修に参加することは日本国外に滞在する機会を与えるだけでなく、普段生活していると見落としがちな自国や住んでいる地域をみつめることができるきっかけとなる。また、実践活動を通して総合的な学習を深めたりする貴重な体験にもなる。海外では特に想像もしていなかったような思いがけない状況に遭遇することもあり、そういった状況でも臨機応変に対応せざるを得ない、といった環境がコンピテンシーの習得を促し、単なる知識を経験や実践に落とし込み、発展させることができる。

そこで平成27年度の海外ショートプログラムの一環として、到達目標への学習プロセスを重視するPBL (Project Based Learning) を用い、「地域活性化」をテーマに掲げた海外研修を試みた。本稿では、学生のグローバルな視点や問題解決や批判的意識など多面的思考力の向上を促すことを目的に実施した取組の内容を紹介する。また、学生の事後アンケートや学習報告書のコメントをふまえ、コンピテ

注1. 本稿は2015年11月14日に実施されたグローバル人材育成教育学会第3回全国大会で発表したものに加筆・修正したものである。

ンシー向上のための「足場かけ」とするPBL型海外研修の有効性を図ることとする。

2. 取組みの概要

海外研修は平成27年9月16日～24日までの9日間、韓国の昌原（チャンウォン）市にて実施した。フィールドワークの日程及び主な活動内容は表1に示す。

参加者は国際文化学部国際文化学科の学生7名と文化創造学科の学生4名、計11名である。国際文化学科の学生は全員韓国語と韓国社会論を学んでおり、文化創造学科の学生のうち、3名はデザインを学んでいる企画プロデュース系、1名は日本文化系の学生であった。学年の内訳は4年生が1名（韓国に1年の留学経験有）、3年生が6名、2年生が4名である。韓国語を学んでいる学生の韓国語能力はCFERのC1レベル（上級：広域な話題や長い韓国語の文章を理解し、状況にあった言葉を選び流暢に自己表現ができ、論理的な主張や議論を組み立てることができる。）が2名、B1レベル（中級：自分に身近な話題や個人的に関心のある話題について主要な点を理解でき、簡単に韓国語による文章や口頭で表現することができる。）が5名で、韓国語学習歴がない

日程	活動内容
16（水）	・韓国入り ・商店街見学
17（木）	・日本文化体験ブース運営①
18（金）	・日本文化体験ブース運営②
19（土）	・地域フリーマーケット参加 「海を越え、ひとまたぎ、おいでませ山口へ」
20（日）	・自由フィールドワーク ・21日（月）セミナー準備
21（月）	・日韓大学生共同セミナー開催 「地域の再生と成長のための幸せな地域社会作り」
22（火）	・昌原市見学

表1. フィールドワークの日程及び主な活動内容



図1. 学生がデザインしたプロジェクトロゴ

学生は4名であった。国際文化学科の学生は全員海外渡航経験があったのだが、文化創造学科の学生は1名を除き3名が今回初海外経験者であった。その他、現地学習の活動中は本学から韓国に交換留学中の学生4名が通訳やサポートとして参加した。

今回のフィールドになっている昌原市は慶尚南道の東南部に位置し、2010年に昌原市、馬山市、鎮海市が合併した都市である。昌原市でフィールドワークは昨年度に引き続き2回目となるが、実施する運びとなった理由は、まず山口市との姉妹都市であること、そして過疎化や空洞化など山口市と共通課題を抱えているからである。今回の研修ではそのテーマを「地域活性化」としており、「幸せは身近にある」というコンセプトのもと、「青い鳥」の童話から「青い鳥プロジェクト」と名付けた。ロゴは文化創造学科の学生がデザインをした（図1）。「幸せが身近に」ということから手のひらと青い鳥が飛んでいるような2つの意味を持ったロゴである。

以下では「地域フリーマーケット」「日本文化体験ブース」「日韓共同セミナー」の3つの活動内容について具体的に報告する。

2.1 地域フリーマーケット運営

「地域フリーマーケット」はチャンドン商店街で1か月に1度、訪問者に商店街を知ってもらうことを目的に、チャンドン・オドンドン・プリム商店街の主催で開催されており、現在では地域住民だけでなく、多くの関心を集めている。今回、山口県立大学の学生は山口県の紹介をテーマに①小野茶の試飲、②大内塗の塗り絵体験、③景観ポストカード販売、④木製コースター販売、⑤浴衣の着付けを行った。山口市の伝統工芸品である大内塗人形は歴史や制作過程を説明するだけでなく、実際の大内塗人形の塗り絵を提供し、親子連れの人にも楽しんでもらった。③景観ポストカードと④木製コースターの作成は文化創造学科の学生が中心となり、昨年度、本フリーマーケットに参加した学生たちや韓国に留学中の学生たちの協力のもと、何が人気なのか調べたり、日本らしさ、山口らしさが出るものは何か、などアイテムから材料の選定、制作までを担当した。具体的には、景観ポストカードは山口県の観光名所をポストカードにし、木製コースターは大内塗人形の顔と山口県の特産物であるふぐの模様にした。ブースにおいても、木製コースターの上に実際に筆ペンで絵



写真1. 小野茶の試飲をすすめている様子



写真2. 大内塗り絵をする親子



写真3. 大内塗人形をお手本に塗り絵をする様子



写真4. コースターへの絵付け実演の様子



写真5. 景観ポストカード



写真6. 木製コースター



写真7. 商店街にて撮影している様子



写真8. ブース全体の様子

を書いている様子を見せ、訪問者に大変好評であった。⑤浴衣の着付け体験は、女性用・男性用の他に子ども用も準備し、着付け後、写真撮影をした。商店街の一角を撮影スペースとし、そこで写真をとる

ことで商店街の紹介にも一役買うことができた。

本フリーマーケット運営は、文化創造学科の学生が製作から販売までを経験する大変貴重な場となったようである。また、韓国語を学んでいる学生は訪

問者の呼び込みや各アイテムの紹介をするなど現地の方々と積極的にコミュニケーションをとることで、これまで学んできた韓国語を実際の場面で使ってみる良い機会となった。フリーマーケットでの売り上げは全て主催者側である地域商圏活性化財団に寄付を行った。

2.2 日本文化体験ブース

チャンドン市場では「3E小道旅行」という地域活性化プログラムを作り、商店街に以前の活気を再びもたらそうとする取り組みを行っている。「3E」とは「Education（教育）」「Economic（経済）」「Experience（体験活動）」を意味し、主催機関は「（財）オドンドン・チャンドン・魚市場商圏活性化財団」、運営機関は「慶南大学校・産学合力団・生涯学習研究センター」である。「3E小道旅行」の目的は小中高校生や地域住民に商店街について学んでもらい、また訪れるきっかけづくりをすることである（詳細は林・森原・吉田,2014を参照）。今回はその「3E小道旅行」の一部として「日本文化体験ブース」を運営する運びとなった。ブースでは日本を体験してもらう場として、①地域（山口市）に伝わる昔話の紙芝居、②大内塗の塗絵、

③徳地和紙のしおり作り、④伝統遊び（けん玉とだるま落とし）、⑤浴衣試着体験を実施した。ブースは2日間にわたって運営し、地域の中中学生193名に日本文化を紹介することができた。紙芝居は山口市に伝わる昔話「といとい」という話を国際文化学科の学生が韓国語に訳し、文化創造学科の学生がオリジナルの紙芝居を作成した。作成にあたっては昔話ということ踏まえ、おばあさんのセリフなど登場人物の特徴に合わせて昌原市の方言で読むなど、工夫をこらした。

大内塗り絵や徳地和紙のしおりでは、ただ単に大内塗り絵や徳地和紙のしおりを作成するのではなく、筆ペンで日本語を書いてみるといった体験コーナーも設けた。プログラムに参加した韓国の中学生が自分の書きたい単語やフレーズをリクエストし、山口県立大学生や手伝いに来てくれた慶南大学の日本語学科の学生に日本語を教えてもらう姿も見られた。伝統遊びとしてはけん玉とだるま落としを紹介したが、参加者はとても熱心に取り組んでいた。浴衣の着付けにおいては、最初は恥ずかしがって試着を拒んでいた生徒もいたが、試着後は気に入ったようであった。体験後、中学生にアンケートを実施したところ以下のような感想が寄せられた。



写真9. ブースについて説明をしている様子



写真10. 大内塗り絵について説明している様子



写真11. 紙芝居の様子

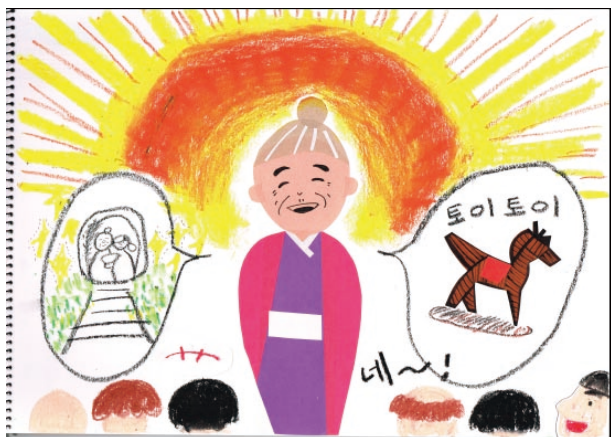


写真12. オリジナル紙芝居



写真13. 徳地和紙のしおりづくり



写真14. 筆ペンで日本語を書いている様子



写真15. けん玉をしている様子



写真16. 浴衣を試着をしている様子

「日本には様々な伝統があることがわかった」
「体験は本当に面白かったし日本に行きたい」
「日本の服を着たら変かなと思ったけど大丈夫だった」
「日本文化が身近になった」
「日本に対する考えが変わった」

普段日本文化に触れる機会があまりない多くの韓国人中学生にとって、日本や山口について興味や関心を持つきっかけが提供できたと考える。また説明する日本人大学生にとっても自国の文化をどのように説明したら分かりやすいのか、興味を持ってもらえるのか、など考えたり、実際に中学生からの質問に答えたりすることで日本や日本文化について改め

て見直すことができたと考える。

2.3 日韓大学生共同セミナー

「日韓大学生共同セミナー」は慶南大学校の大学生とともに実施した。セミナーでは「地域の再生と成長のための幸せな地域社会作り」をテーマに日本・韓国それぞれの地域の抱える課題を共有し、解決策を考え、ディスカッションを行った。具体的には、初めに慶南大学生から地域社会問題とその問題に関する分析、自らが取り組んだプログラムについて発表があった。本プロジェクトの受入先である慶南大学教育大学院のチョン・ウンニ教授の担当科目では、学期を通して地域活性化について考え、グループごとに問題解決に向けたプロジェクトの企



写真17. 慶南大学生の発表



写真18. 山口県立大学生の発表



写真19. グループ活動の様子



写真20. グループ発表の様子

画・運営が課題となっている。今回のセミナーでは、数々のプロジェクトの中でベストプロジェクトに選ばれた学生グループの代表学生の発表であった。取組みの内容はSNSの1つであるFacebookを活用した地域活性化で、大学生がFacebookに投稿したりコメントをすることで、多くの人に地域のことを広報・周知するというプロジェクトであった。ウェブサイトを投稿してから、閲覧者が増加し、授業が終了した今でも大学生だけでなく、地域の方、地域外の閲覧者が増えている状況であるとのことだった。「身近なところから始めること、大学生でもできることを探して実行することが重要であると感じた」との報告は大変印象的であった。

一方、山口県立大学の学生からは山口市にある昔ながらの建物や風情のある歴史的な大殿大路地区に実際に赴き、その地域の雰囲気や様子を伝えるために自分たちが制作したビデオを紹介するとともに、今後は学生も地域の方と協力し、「イベントなどがあつたときにボランティアスタッフとして参加する」「広報をする」などと、より積極的に参加する必要がある。また、現地調査を行う中で、地域の店舗経営者、NPO関係者のインタビューで明らかになった、「人がにぎわうこと」が「地域活性化」ではないこと、今の暮らしや静かな雰囲気を大事にしたいと思っている人もいることを受け、そういった人たちをどのように巻き込んで「地域活性化」に取り組んでいくのが今後考えていくべき課題であるとの報告を行った。

このように昌原市と山口市両地域について共通認識を持ったうえでディスカッションへと移った。ディスカッションは日韓大学生5～6名のグループを構成し、①「幸せな地域社会」とは何か、②「幸せな地域社会」を妨げるものは何か、③幸せな地域

づくりのために大学生ができることは何か、についてグループごとに意見交換を行った。その後、グループごとにまとめた意見を発表した。

グループ発表では「国は違っても地域の問題は似ている点があるというのが発見だった」「地域活性化を妨げる一番の障害は無関心であること」「地域愛をもって地域を知ることからはじめたい」という意見が多く見られた。

3. 取組みの成果

本研修では、学生自らが主体的に「自分の役割」「自分に何ができるのか」を客観的にとらえ、チーム全体に貢献するために意識し行動できるよう、研修期間中毎日15分程度の内省の時間を設けた。15分という時間は研修中のあまり時間がない中で確実に毎日確保するために適している時間だと判断したからである。その日の自分自身の行動、何をしたのか、どんなふうに感じたり考えたりしたのか、など一日の振り返り後、次の日の活動内容や日程にあわせて行動目標を立て、個人の冊子にメモをとるようにした。今回の記録については、学生からも、毎日振り返りの時間を持ち、記録をしていたことで研修中に感じたり考えたりした小さなことを忘れずに胸にとどめておくことができた、という声が寄せられた。

本研修に参加した学生の事後アンケートや学習報告書にあった気づきや感想を以下のカテゴリーごとにまとめ、下記に示す。

問題解決の意識

- 難しい点があつても考え行動し変えていこうとする点を学んだ。
- 課題を発見する力が身についた。今回は大殿大路を取り上げて自分たちなりに改善案を出したが、

他の街にも活かせる点があると思う。

- みんなで意見を出し合っているいろいろな企画してきたり、共同セミナーでの経験などは今後のグループワークのときなどで役立てると思う。

グローバルな視点

- 異文化の人と接するとき、どのようにしたらよく伝わるかこのプログラムで考えたり、工夫したりした。
- 韓国で、韓国の人に分かりやすく山口や日本について表現することが大事だと学んだ。
- 地域社会を考えるという大きなテーマはもちろんのこと、異文化に触れ、人と関わったことで、相手を尊重し、思いやりをもって接することができるようになった。
- 多様性理解。海外滞在や異文化交流という経験は、今後もある可能性が高いので、参考にしたい。
- 今回のプロジェクトで、改めて「世界にはいろいろな考え方の人がいるなあ」と感じた。それを感じ、理解する、理解されることを経験したので、この経験はどんな場面でも適応すると思う。
- 他国に向けてモノを作り売るということは、普段では絶対できない経験なので貴重な経験になった。
- 自分がつくり出したものが、国外の人にも伝わるというのは素晴らしい機会だったので、積極的に国内外へ広く発信していきたい。

批判的思考力

- 相手のことを知るためには自分のこともよく知っておかなければならないということを実感した。
- 難しい点があっても考え、行動し変えていこうとする点。
- 現状を把握し、逆算して行動していく力と人の意見を聞くことを学んだ。
- 課題発見力。今回は大殿大路を取り上げて自分たちなりに改善案を出したが、他の街にも活かせる点があると思う。
- フリーマーケットのアイテム制作にあたり、去年の参加者たちに来場者の年齢層など聞きつつ作ったが、実際のフリーマーケットは自分が思っていたものと全く違っていた。これを通し何かを作る際、一度でも現地に行き、その場の雰囲気確かめてモノを作らなければならないと感じた。（事前に行き、調べることの大切さを学んだ。）

多面的思考力

- 地域の抱える課題は国が違っても共通するものがある、もっとお互いに協力し合えると思ったため、他の分野でも同じことがいえるのではないかと考えた。将来の仕事に生かせよう。
- チームで動くときの自分の役割を把握すること。
- 自分には何ができて何ができないのかなど強みが何か分かったのはとても大きい気がする。社会に出たら自分の役割が何かというのは大切だと思うので活用できると思う。
- 社会に出たら自分の役割を認識してどう動くかということと人と働く上での関係の築き方は今回のプロジェクトで学んだスキルを生かせるのではないと思う。
- 探究心。何事にも好奇心を持って小さな事でも疑問が湧いたら調べてそこから学習を広げていきたい。

4 おわりに

上記の学生の感想やコメントからも分かるように本研修は、多方面で学生に学びの機会を与えるだけでなく、毎日の振り返りの時間を持つことによって自分の役割や自身の変化と客観的に向き合い、次の行動を促す「足場かけ」としても有効であったと評価できる。

一方、近年では海外研修についてどのようなアプローチで評価をすべきなのか、など評価方法が議論の中心となっている。海外研修を通して学生が習得したスキルや意識の変化は短期間で劇的な変容を遂げるものではない。研修の学びを今後につなげ継続させるためには、学習者が自身の変化や成長過程を客観的にとらえる仕組みを構築することが重要であると考える。

今後は学習者の形成的評価を重視した海外研修を通して学んだスキルや意識の変化をさらに発展させるためにはどのようなフォローアップが必要なのか、学習スキルの可搬性や持続性の観点から検討していきたい。

引用・参考文献

- 1) Griffin, P., & Care, E. (Eds.) (2015). Assessment and Teaching of 21st Century Skills - Methods and Approach. Dordrecht: Springer.
- 2) 林炫情・森原彩・吉田琴美 (2014) 海外フィールドワークを通して育む「グローバル地域マイ

ド育成」プログラム開発の試み、『山口県立大学
国際文化学部紀要』16号、pp55-63.

- 3) LIM Hyunjung・MORIHARA Aya (2015)
Learning Progression with regard to Cultivating
a "Global-Lobal-Mind": Essential Competencies
for the 21st Century、グローバル人材育成教育
研究、第2巻、第2号、pp14-22.
- 4) 三宅なほみ監訳 (2014) 『21世紀型スキル—学
びと評価の新たなかたち』北大路書房

謝辞

本研究は、公益財団法人 韓昌祐・哲文化財団の
平成25年度助成金（代表者：林炫情）を受けたもの
です。

林 炫情（いむ ひょんじょん）山口県立大学国際文化学部教授
森原 彩（もりはら あや）山口県立大学グローバル人材育成支援プロ
ジェクトチーム助教
鄭 恩姫（ちょん うんひ）韓国慶南大学校教育大学院教授